Osaka University Knowledge Archive

Title	中国と商業
Author(s)	斯波, 義信
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2008, 48, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7073
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国と商業

斯　波　義　信

東洋文庫の斯波です。本日は大阪大学の名誉教授の称号を頂きまして，大変名誉なことで，光栄に思っております。ありがとうございます。その上に講演の機会を設けてくださいまして，みなさんの前で一時間ばかりお話しすることになりました。

1．はじめに

私の考えました題は「中国と商業」です。私が大学を卒業したのは昭和28年（1953年）ですが，それからずっと50年間あまり，ばかみたいに同じテーマを追い続けているわけですが，このテーマをめぐって，かいつまんでいえばこういう問題がある，というようなことを今日はお話しさせていただきたいと存じます。

まず，なぜ商業の研究にしたのか，について申しましょう。私の中学と高校は七年制の旧制高校で，名前は府立高校，1943年から都立高校，その尋常科（中学部）と高等科で学びました。尋常科からずっと，西洋史の松田智雄という，経済学者として有名な人ですが，その先生の授業を受けることができました。松田先生は私が高校の三年になる前に東大に移られますが，ドイツ中世商業史の話をしてくださいました。温厚で風格のある，話のおもしろい先生で，時々ドイツの教科書を持ってきて具体的に話をされて，12，13世紀から産業革命期までの間のドイツの都市とか農村では，こういうふうに商業が起こって社会の変動があった，というようなことを概説の間に説かれて，それが大変印象に残っています。私は高等科では文科乙類で，第一外国語はドイツ語でした。図書館に行って習いたてのドイツ語で『ドイツ中世の大商業と小商業』なんかをパラパラッと見てみますと，内容も大変おもしろそうでした。ただドイツの商業史をやろうとすればドイツに行かないといけない。この時期それも大変だと思いまして，日本でやるとすれば，中国の史料なら利用できると思いまして中国史つまり東洋史を大学で専攻しました。

学部では定年直前の和田清（せい）先生から概説を習いましたが，卒業（1953年）前後の1952，53年に，中国経済史の開拓者で，和田先生とは親しかった加藤繁という大先輩（惜しくも1946年に亡くなったばかりでしたが），その論集が和田清，榎一雄先生ほか，お弟子さんであり，私が中国史について手ほどきをうけることになった青山定雄，中嶋敏，周藤吉之，西嶋定生，

中山八郎先生たちの編集で，『支那經濟史考證』上下冊として東洋文庫から出版されました。これは実に大きな刺激剤でした。加藤先生は，一般経済史（私経済）研究に取り組みましたが，初めは土地制度を調べました。その後，財政の基礎となる貨幣を研究した博士論文で学士院恩賜賞（1928年）を受賞され，転じて私経済の歴史に挑まれました。経済史自体が古典派の時期から数えたら200年ほどの若さでしたが，中国経済史は国内外ともに全くの誕生期でして，概念を構築して他世界のそれと比較するとか，既成の理論を事実でテストするとかのはるか以前，本源史料（根本史料，一次史料）を集めて実態を解き明かすこと（つまり‘考証’）がまずなすべき課題でした。和田・加藤先生がその参照枠にされたのは，英・独の歴史派経済学の論著です。この派の説は歴史主義，発展段階，国民経済（政治経済）を重んじますが，両先生はなかんずく‘歴史主義’に共感されたようです。『支那経済史考証』という題は，加藤先生自らの発案なのです。‘国民経済’については，利用できるデータとして公経済（政府財政）史料が多いところから参照にされましたが，研究の主眼は経済史，ことに私経済の叙述でありまして，必要十分な根本史料を整理して公開することでした（『支那経済史考証』巻上，p. 3和田清氏序を参照）。‘発展段階’については，中国経済の歩みが〈漸進発展〉，つまり漢唐よりは宋元，宋元よりは明清が進化したと考えるべきだ，という姿勢でした。

加藤先生は貨幣研究のあと，商業・産業にテーマを広げました。その中で，中国の産業，商業発展というのは，およそ唐の終わり頃にひとつの変動があって新しいサイクルに入って宋元，明半ばに至り，明末清初のつぎのサイクルへと次第に発展したという〈長期経済変動〉の見通しを立てていました。私は中国をフィールドにしながら，ちょうど松田智雄先生の話に当たるようなこと，つまり西洋でいえば封建経済の爛熟に向かう時期の変動をやるとすれば，結局唐宋から以後を扱うべきだろうということで勉強を始めたわけです。

和田・加藤先生流に中国社会の漸進発展に関わらせて商業に取り組んだころ，いまでいえばパラダイムの変化に出会いました。それは，歴史派経済学流の発展説をさらにジャンプさせた唯物史観の発展段階論が，当時のわが学界を大げさにいえば風靡したことです。これは中国社会の進化の軌跡を世界史とリンクさせながら，はっきりと段階を画するステージ・バイ・ステージの進化の継起として見るもので，分析の視角・論点を広げ，鮮明にしたことは否めません。その一方，この説は西洋社会の進化発展を比較の尺度とする「近代化論」と重なっていて，文字通り蝸牛の歩みで蓄積されつつある中国経済の根本史料の状況を考えたとき，正直いって性急かつ大胆なジャンプでした。つまり長久で広大，かつ複雑な中国社会を，あたかも同質で一枚岩の構造物に見立てようとするきらいがありました。たとえば「二分法 dichotomy」の論法です。

中国社会の構成において，しばしば皇帝／官僚と小農民という二大要素への還元が説かれ

ました（一君万民の説）が，社会から自然に発生したさまざまな中間層位のネットワーク，すなわち郷紳の組織，宗族の結束，地主経営の諸相，客商の活動や秘密結社，同郷幇・同業幇の連帯，清末の団練のような村落連合，市場の成層関係などは，二分法図式のなかでは脇役くらいに扱われました。同じく，実社会の複雑性を端的に示している地域差・時間差についても，これを説明すべく議論を組み立てる努力がなおざりにされました。もちろん，実証客観的な研究態度はつねに堅持されていたのですが，データの集積ペースがおそいために，マクロ・データないしは容易に概括できるデータの活用に先に目が行き，中央政府の行政記録，財政や政策の記録，官僚エリートの記録をもって，あたかも経済・社会実態そのものと等値して説明をくだす傾きがあって，この風潮はいまでもつづいています。

しかし実際に史料を大量にまた細かく読んでみると，商工業をはじめ，社会の中間層位の実態に関する史料はいわば‘ぞろぞろ’と出てくる次第でして，たとえば宋代だけをとっても，社会の実状はそれほど単純なものではないという感触をもちました。

こうして私はいささか取り残されたという感じで，加藤・和田先生の説をそのまま引き継いでいったわけです。たまたま『宋代商業史研究』というテーマをまとめていた1960年ころ，東洋文庫に研究のため滞在していた英国 SOAS（当時）の Denis Twitchett 先生に会い，宋代の鎮や市について書いた拙論を読んでもらったところ，スタンフォード大学の人類学者の G. W. Skinner 先生が中国市場や都市の階層的なネットワークを研究して注目を集めていて，いま彼が学際集会を企画しているから，参加して見聞を広めてはどうかと助言をいただき，紹介もしてくださいました。これ以後，国内学者との交流以上に欧米の中国研究者から，研究の資料のありかた，理論的整理のフロンティアーの問題について随分と教わりました。ちょうど1950年代，1960年代の米国では，中国の理念と制度をめぐる大規模な一連の学際集会（A. Wright, ed. 1953, J. K. Fairbank, ed. 1957など）がつづいていて，しかも同じ時期に戦中・戦後になされた人類学調査の成果が広く知られてきまして，1970年代から既成の概念やモデルを新しいエンピリカル・データで検証する方向が生まれて（F. Wakeman & C. Grant, eds., 1975など），その後の社会史研究の起こりにつながっていくその過渡期でした。私が阪大にお世話になったのは30歳代の終わり（1969年）から50歳代の半ば（1985年）までですけれども，大学のお許しをいただいて長期（1年）の海外研修のほか，学会参加目的の短期研修にも頻繁に行かせていただいたことを今でも感謝しております。

だいぶ脱線しましたので，あとはハンドアウトの項目に沿って申します。中国社会のあゆみについて，私は漸進成長の説に従いますが，そのなかで100年，200年，500年，1000年の〈長期変動〉secular trend，long-term cycle を考えることはできます。ところが〈長期変動〉を語るにしても，さまざまな角度からの先入観が史料の中にも学者の論述の中にも入り込んでいて，議論が容易ではありません。その第一は「不変の中国神話」，裏返せば‘一国

中心主義’でして，外来要素（仏教・北族の影響・貿易）の吸収に起因する文化変容を極小に評価します。第二の二分法の誇張はすでに述べました。これには理論の偏りだけでなく，中国の文献がよく使う修辞ないし論法も加わり，つねに必ず実態を指しているとはいえません。第三に「朝貢あっての貿易」という説もいい過ぎです。実際には，朝貢のない貿易の例はいくらでもあって，六朝のときの南方中国もそうだし，宋代はなんら朝貢を徹底したわけではない。明の初めの五十年間は朝貢と公貿易をまれに見る厳格さでやりましたが，それ以後は大幅に弛め，海防をきびしく維持する体制でもなかった。明末からのオランダ・ポルトガル・イギリスと中国との貿易は朝貢なしです。

それから偏見というより，史料自体のバイアスという陥穽があります。その一つの例として，華僑史料として出色というべき，陳翰笙という尊敬すべき学者が編纂した苦力貿易の史料があります。内容を読んでみますと，中国における‘史料’の考え方がよく分かってきます。この史料集の中で冒頭を飾っているのは政府の文書であり，その一番トップに来ているのは皇帝の詔勅とか上諭。その次が曽国藩とか李鴻章などの各省総督が報告した文章あるいは上奏文。それから中央六部に残っていた文書。そしてその後に，華僑が虐待を受けたペルーとかボリビアとかへ派遣された大臣，その時の駐在公使が調査した史料が位置します。この最後の部類にむしろわれわれが考える一次史料が存在します。苦力の何某がどういう契約条件でいつ，どこの県の何村からやって来て，名前は誰で年はいくつでどんな虐待を受けたか，それからこの現地の公の労働契約の仕来りはこんなだったと。そういうことが聞き取り資料として書いてある。ですから史料を一次，二次の順で並べるのなら，この類が第一次史料です。それは史料の価値の高さは，本人が現地で述べ書いたものとすべきだからです。では，なぜ逆転した序列になるかというと，「雅」と「俗」という問題にからんできます。現地の地方(ジカタ)的なデータというのは中国では「俗」になります。地方で地方志の原稿が採集され編集される時点で，現地の役人がそれを「俗」から「雅」に修飾し推敲して，それを中央に送ってさらに推敲している。宋代でも，同じ記事について『会要』と『正史』の記述内容を比べてみると，上級の官庁に送達される都度，修飾が加わっていることがよくわかります。

2.「四民（士農工商）」の説と社会の現実

ところで，中国の商業の話をしますと，一般の聴衆の方からよく出る質問は，中国は〈士農工商〉という社会階層の厳密な規定があると聞いているのに，その中から商人はどうして起こり得たのか，というものです。この説は，江戸時代に行われた日本独特の厳格な士分，農民，町人，職人〈四民〉身分の制度を，無意識のうちに中国社会に二重写しにして考えることに一因があります。中国の〈四民〉説は由来も，ねらいも，運用も，日本のそれとはだ

いぶ違う内容です。つきつめていえば，社会イデオロギーないし社会観念と社会現実のかかわりがどう推移したか，という話題に帰着します。すでに和田清先生が歴史家として論じ（1956），瞿同祖氏（1957），何炳棣氏（1962）が社会の階層化とモビリティー（社会移動＝流動）の相関の関係として議論し，これを社会学者の Gilbert Rozman 氏（1981）がまとめています。

まず，「四民」の説は，先秦の戦国時代に遡ります。西周の「封建」と呼ばれる王侯貴族を主役とする社会の秩序が瓦解に瀕してきて，世襲と階層に支えられた旧貴族が新しい世相に適応できなくなり，新生した非貴族の「庶民」＝士農工商を再編して，治者（「士」）と被治者（「農・工・商」）の二大別からなる社会体制を作り上げるという目標がありました。「士」（学者／官僚）は世襲貴族ではなくて，農・工・商と同列の「庶民」の一部類でした。ただし西洋風の平等主義（egalitarianism）は中国では19世紀にいたるまで育たず，むしろ精神労働と肉体労働の優劣が議論される（孟子）という背景がありまして，「庶民」を治者と被治者に二大別するに当たって，治者の選抜を普遍妥当な原則によっておこなう方向が模索されました。結局，「庶民」各人の功業（achievement, merit）のうち，教育の達成水準で選ばれる教養人を治者に編入するという，後世の科挙につながる選抜法が洗練を重ねていくことになりました。この発端期では，農・工・商の各業は社会の〈必要善〉として位置づけられましたが，治者の選抜に向けて間口がなしくずしに広げられていくのは王朝時代に入ってからです。

この治者選抜をめぐる社会イデオロギーでは，二つの点が注目できます。一つは〈オープン社会〉という理想でして，世襲と階層を極力排して社会移動（social mobility）を促す，その手段に教育を用いるということです。ふたつ目は〈シングル・キャリアー〉(single carrier)，わかりやすくいえば「士」の階層を社会の威信序列の頂点におく，出世双六の上がりとして至高のゴールにおく，ということです。こう申しますと，「なんだ，結局は官僚が地位を独占するために考え出したレトリックではないのか」，と思われるかもしれませんが，官僚はよほどの高官でないかぎり，官職を世襲できないという歯止めがありましたので，一代を終わると，跡取りは教養で世間に突出しない限り，所詮は一介の庶民に逆戻りする原則となりました。

秦漢からの王朝時代になりますと，「四民」イデオロギーの運用の上で，新規の問題をかかえました。当初の王朝の財政収益および兵役・夫役の徴発において農業の比重が高かったために，当然ながら農民を尊重する姿勢を示す反面で，流通・分配部門を担う商人勢力の成長を警戒し敵視する政策が折りに触れて顔を出すようになりました。漢の武帝の「七科の謫」は有名です。謫（たく）とは流刑のことです。匈奴を遠征するために大量の兵員の動員が必要でしたが，七種類の範疇の民を対象としてそれを兵役にくり入れました。官吏で罪を犯した人，

本籍を離脱して遍歴している人（客商も入ると思います），入り婿（同姓不婚，異姓不養の家族主義に背くが，現実には多い），都市の官設の市場でその帳簿（市籍）に現に登録されている商人，同じくかつて市籍に在籍した商人，父が在籍した商人，祖父が在籍した商人，という徹底ぶりでした（「1．吏有罪者，2．亡命，3．贅壻，4．賈人，5．故有市籍，6．父有市籍，7．大父母有市籍（市籍＝都市内の官設市場の戸籍）」『漢書』6，武帝紀，天漢4（BC.97），和田清，1956）。この政令の下では商業は〈社会悪〉にまで追い込まれた次第です。しかし普通の農民に比べれば相対的に実力者であった商人は，社会の拡大・発展に歩調を合わせて成長しつづけていました。前漢の鼂錯と司馬遷は，ともに社会の現実として，商人が「四民」のランク序列を逆転しかねない勢力として巷間では受け取られていたことを記述しています。（鼂錯：「而商賈大者積貯倍息，小者坐列販売，操其奇贏，日游都市，乗上之急，所売必倍，故其男不工耕耘，女不蚕織，…此商人所以兼并農人，農人所以流亡者也，居間法律賤商人，商人已富貴矣，尊農夫，農夫已貧賤矣」『漢書』24上，食貨，和田清，1956，司馬遷：「凡編戸之民，富相什則卑下之，伯則畏憚之，万則僕，物之理也，夫用貧求富，農不如商，刺繡文不如倚市門，此言末業貧者之資也」『史記』貨殖伝　和田清，1956）。

社会イデオロギーとしての農本・抑商の言説は，強調の程度の差はあっても王朝時代を通じて折々に顔を出し続けてきました。たとえば，清代でも地方志の戸口統計のなかに，管下の人口を士農工商の別で集計しているものがあって，そうしたデータの中で「農民」範疇の比率を見ると90％ぐらいにはなりますから，「だから中国は圧倒的に農民社会だ」という説になりかねないわけです。ところが幸いなことに，職業分布の実情を示す史料が少数ですがいくつか残っています。まず天津府天津県の1842年の「保甲冊」（東洋文庫蔵）です。天津府というのは北京から大運河が通じていて，河北省内の中都市です。天津県のすぐ北で大運河が西南に向けて転じるところで，海河という太沽港において渤海湾に注ぐ運河に接続しますがこの合流点に天津府が位置します。次の表の左端タテの番号は保甲（小行政区）の区画ナンバーでして，20は天津城，1～9は海河に沿うもの，うち9は太沽で4，5は運河上の集散地。10～12は西隣の県との境に広がる純農村地帯，13～19は大運河に沿って位置する商業化した農村です。職業区分の排列を見ますと，「四民」流の威信の序列がまだ若干は影を落としています。この時期，官僚の戸籍は別建てですから，紳衿というのは在野の官僚や官僚候補者か学者です。塩商は特許商人なので高い地位にいます。鋪戸は店舗を構える商人ですが，煙戸つまり自営農民よりも上に位しています。客商の計数がないのは，この地に滞留するだけで戸籍を置いていないからです。

区	方位	紳衿 紳士	塩商 塩商	鋪戸 商店	煙戸 自作	応役 胥吏	傭作 雇傭	負販 行商	船戸 運船	捕魚 漁民	乞丐 乞食	僧道 僧侶
1	東	0.90%	0.00%	4.40%	74.60%	0.60%	8.10%	6.20%	3.40%	0.80%	0.20%	0.20%
2	東南1	0.50%	0.10%	9.20%	54.40%	0.90%	12.20%	14.60%	5.20%	0.00%	0.20%	0.70%
3	東南2	0.50%	0.00%	9.30%	70.20%	0.00%	9.30%	9.70%	0.20%	0.00%	0.50%	0.30%
4	東南3	1.00%	0.10%	8.30%	68.60%	0.90%	6.30%	3.70%	6.60%	0.00%	0.60%	0.60%
5	東南4	1.50%	0.20%	11.90%	40.40%	0.40%	10.50%	9.50%	24.10%	0.00%	0.50%	0.40%
6	東南5	0.40%	0.00%	7.50%	53.70%	0.10%	16.60%	3.70%	13.10%	0.00%	0.00%	0.30%
7	葛沽	0.80%	0.00%	7.60%	36.10%	0.80%	2.10%	49.00%	2.60%	0.00%	0.70%	0.40%
8	東南6	1.30%	0.50%	2.20%	55.70%	2.10%	13.00%	8.40%	5.60%	4.80%	1.00%	0.40%
9	太沽	0.70%	1.80%	2.60%	39.80%	10.30%	2.30%	9.10%	32.20%	0.00%	1.00%	0.30%
10	南1	4.20%	0.00%	1.90%	74.50%	0.00%	12.00%	3.70%	0.00%	0.00%	0.00%	1.20%
11	南2	0.30%	0.00%	1.00%	80.00%	0.00%	12.90%	4.20%	0.00%	0.00%	0.70%	0.90%
12	南3	0.60%	0.00%	3.30%	83.60%	0.00%	6.30%	5.00%	0.20%	0.20%	0.30%	0.40%
13	西	0.50%	0.00%	1.30%	50.60%	0.40%	43.20%	0.90%	2.70%	0.00%	0.20%	0.30%
14	南西1	0.70%	0.20%	3.60%	57.00%	1.80%	24.10%	6.40%	2.40%	0.00%	0.00%	0.60%
15	南西2	1.00%	0.10%	2.90%	67.60%	0.30%	19.60%	2.60%	5.40%	0.70%	0.00%	0.70%
16	楊柳青	0.60%	0.00%	6.80%	56.80%	0.60%	10.50%	2.90%	21.10%	0.00%	0.20%	0.30%
17	北西1	1.20%	0.00%	15.50%	39.60%	1.10%	12.40%	12.10%	15.10%	1.50%	0.60%	0.40%
18	北西2	1.00%	0.00%	10.70%	56.60%	0.60%	20.70%	3.90%	5.00%	0.00%	0.20%	0.70%
19	北	1.60%	0.00%	8.50%	5.30%	0.10%	15.70%	10.30%	5.10%	0.50%	0.30%	0.40%
20	城内外	2.00%	1.10%	35.40%	29.60%	5.80%	2.20%	17.40%	3.00%	0.00%	0.30%	0.30%

（百瀬弘『明清社会経済史研究』，1980，原載『小野博士還暦記念東洋経済史論集』1948，G. Rozman, *Population and Marketing Settlements in Ch'ing China*, Cambridge Univ. Press, 1982, Rozman, ed., *The Modernization of China*, The Free Press, 1981）

つぎに1970年代，山東省の省都のすぐ東，滋陽県都市部の「戸冊」（東洋文庫蔵）があります。この集計は城内の全域をカヴァーしていない不備があります。概要は商業55%（うち一般商業13.2%，小商業29.5%，食料品店26.7%，食店10.4%，衣料店8.5%，雑貨店10.7%，金融1.3%），工匠11%，農民7.3%，生員・官吏候補者5.1%，軍戸2.6%，傭工1.2%，僧・道3%，無記入15.3%で，不完全ながらおよそのイメージを伝えています。
（山根幸夫「“山東省滋陽県戸冊”について」比較文化研究所紀要45，1963.6.）

近代式の全国センサスが使えるようになるのは1957年からですが，清末，民国期に地方別にかなり頼れるデータがあります。そのひとつ，1933年次，浙江省鄞県（旧寧波府鄞県）管内の職業分布の集計があります。これは省議会選挙および学区制施行に対応したもの

浙江省寧波府鄞県の「戸口表」1933,『民国鄞県通志』輿地志

区	方位・都鄙の別	党員男(%)	官吏男(%)	軍人男(%)	警官男(%)	農民男(%)	工人男(%)	商人男(%)	教育男(%)	自由業男(%)	其他男(%)	小計(人)	失業男(人)	無職男(人)
1	城内南半	0.04%	0.40%	0.14%	0.26%	1.43%	37.87%	51.87%	3.35%	0.63%	4.00%	36,047	209	466
2	城内北半	0.07%	1.75%	0.35%	0.66%	0.43%	37.98%	54.05%	1.28%	2.18%	1.25%	13,463	212	−
3	近城西郊	0.20%	0.65%	0.20%	0.40%	22.53%	28.00%	46.00%	1.00%	1.00%	0.02%	8,407	203	41
4	近城東郊		0.20%	0.52%	0.32%	13.18%	38.70%	45.51%	1.09%	1.20%	0.28%	15,402		1,064
5	近城北郊	0.01%	2.46%	0.22%	0.69%	1.88%	30.12%	41.25%	2.92%	1.29%	19.16%	12,269	284	50
6	近西農村	0.02%	0.05%	0.03%	0.09%	51.66%	19.54%	23.46%	1.06%	1.74%	2.35%	41,357	589	3,553
7	西辺農村		0.11%	0.06%	0.12%	58.10%	25.24%	14.10%	0.66%	0.26%	1.35%	23,878	52	25
8	近南農村	0.02%	0.10%	0.30%	0.20%	38.51%	20.09%	24.56%	4.20%	1.80%	10.22%	45,463	1,412	2,063
9	南辺農村	0.52%	0.01%	0.03%	0.01%	47.25%	24.67%	25.30%		2.00%	0.20%	25,259	6,254	45
10	近東農村	0.01%	0.08%	0.09%	0.07%	41.20%	24.04%	30.70%	0.55%	0.60%	2.66%	40,627	72	321

区	方位・都鄙の別	党員女(人)	官吏女(人)	軍人女(人)	警官女(人)	農民女(人)	工人女(人)	商人女(人)	教育女(人)	自由業女(人)	其他女(人)	小計(人)	失業女(人)	無職女(人)
1	城内南半	0	0	0	0	0	1,502	120	213	27	561	2,423	466	32,786
2	城内北半	0	0	0	0	0	496	10	27	13	28	547	0	1,206
3	近城西郊	0	0	0	0	0	820	13	6	31	0	870	0	11,300
4	近城東郊	0	0	0	0	82	1,018	382	21	8	9	1,520	0	17,338
5	近城北郊	0	0	0	0	2	537	55	94	5	66	759	0	12,461
6	近西農村	0	0	0	0	85	26,877	893	1	283	2,648	30,787	191	19,914
7	西辺農村	0	0	0	0	0	9,050	37	9	7	8,852	17,955	0	12,719
8	近南農村	0	0	0	0	18	5,601	268	718	240	36	4,881	1,307	2,933
9	南辺農村	2	0	0	0	0	0	719	5	0	0	726	0	43,691
10	近東農村	1	0	0	0	1	836	9	8	4	0	859	0	57,699

Y. Shiba, "Rural-Urban Relations in the Ningpo area during the 1930s" *MTB*, no.47. 1989, 斯波「1930年代寧波の都鄙人口」, 友杉孝『アジア都市の諸相：比較都市論にむけて』同文館, Nyok-ching Tsur, "Die Gewerblichen Betriebsformen der Stadt Ningpo" ZGS 30, 1909.

で，25,000分の1の詳しい地図とセットになったものです。全県を10区に分け，1と2は城内，3～5区は直接の近郊，6～10は後背の農村部で6と7が西方，8は南方，9は東南辺の丘陵地，10は同じ東南ですが都市部に隣接しています。この鄞県の都市部と近郊農村については，1906年に清国留学生としてドイツのライプツイッヒに留学し，経済史学者の Karl Buecher 氏に師事した Nyok-ching Tsur（Chou I-ch'ing）という人が，経済人類学の方法で詳しい郷里の実情を論文にして ZGS 誌（Zeitschrift fuer Gesamte Staatswirtschaft，30巻，1909年）に載せています。30年弱年代がへだたりますが，互いに参照してみると，職業別人口の配分比には大きな違いは認められません。

以上の計量データによって，実態としての清末の職業分布を見ますと，まず「士」の人口は当然ながら極小です。農業専業者は，農村部で40%，50%から70%，80%程度，都市部で20%から30%。雇用者は天津の農村部で16%前後，寧波では都鄙ともに30%ほど，商業従事者は天津県，滋陽県の都市部で30%以上，天津県の農村部で，運船業者を合わせると10.2%，寧波では都市部で40%，50%，農村部で20%，30%です。寧波の6区の農村で女性の工人が突出しているのは，この地における畳表の製造という特産の加工にからんでいます。

3．社会の変動，社会移動の変容と科挙の効用

さて，唐・宋時代に入ると，「四民」の状況が変わってきます。唐の半ばからはじまる社会変動を如実に示しているものは両税法の導入（780）にほかなりません。このころ「士」の立場からする議論のなかに，今や「四民」ではなくて，「六民」「八民」が社会の現実であると唱える言説が生じました。これは士農工商に加えて〈老〉〔道士〕，〈仏〉〔仏僧〕，〈兵〉〔傭兵〕，〈游手〉〔雇傭人・サービス業〕の輩出を直視して，政策を見直すべきだとするものです。〈道士〉と〈僧侶〉は数世紀も前から教団活動を公認され，官僚制に擬する専業の聖職者養成の制度を整えて，免税措置を受け，独自の戸籍に属して，その社会威信はもはや無視できませんでした。さらに〈道士〉層の底辺には，療病の施設や技術，医薬の頒布，あるいは日常の占卜の需要に応える準インテリの多数が，都鄙を問わずに広がっていました。〈兵〉は府兵制から傭兵制への一大シフトにつれて，清末まで各王朝で経常の数で百数十万の常備軍をかかえ，月給で雇われ，独自の戸籍に入っていました。〈游手〉として蔑視のニュアンスを込められた階層は，農民の副業・園芸農家・専業・副業の交通労働者・小規模行商・都市や町の各種のサービス業・俳優歌手などです。この新範疇の雑業者は，旧套のままに保守されていた士農工商の戸籍分類の下では，脱漏するか，農戸に無理に繰り入れられるか，あるいは捕捉が困難な業種でした。かれらの存在は，納税資産の査定とか災害復

旧政策の施行とか，商税（入市税と通行税）の運用，農村振興策の措定をめぐって，つねに問題を投げかけ，北宋の陳舜兪，欧陽修，司馬光，南宋の史浩，朱子の政策論議に頻繁に登場するようになりました（斯波，1968）。明末には「二十四民」の説さえ現れました。すなわち士人，農夫，匠人，商賈，軍人，僧侶，道家，医者，卜者，星者，相者，相地，奕師，駔儈，駕長，舁人，篦頭，修脚，修養，倡家，小倡，優人，雑劇，響馬巨窩（明末，姚旅の説，梁其姿，1997）です。ただし，詳しさを取り柄にしている言及なら，北宋の孟元老の『東京夢華録』，南宋の呉自牧の『夢粱録』に既に現れています。

以上は，社会の底辺から起こった，ボトムアップの職業の多様化に触れたわけですが，この流動化にまつわる社会移動の拡幅が，その一方で隋・唐・宋に整備されるようになった科挙の運用と，陰に陽にかかわっていたことにも注意を払わなければなりません。

4．科挙の効用と社会移動の実態

唐初から1905年までも続いた科挙制が，「四民」の別を空疎化する上で発揮した力は，実は計り知れないものがあります。まず公私の教育施設の普及（国子監，府州学，県学，書院，社学，義学，市学など）を背景として，全国に一律に同時，三年かけて三段階（進士，挙人，生員の各学位）で定期に行われた科挙は，農・工・商からの選抜を実質的に許していて，“open society”という理想を実体化する上では画期的な試みでした。

さらに，科挙では「士」への立身を最終ゴール〈シングル・キャリアー〉とする体制を守るべく，さまざまな工夫を使ってなんとか清末まで実施されたために，人口のわずか5％足らずの「士」への狭き門は，一面では競争原理を広く社会に植え付け，その一面では，出世の構図を，たんに成功と失敗の二者択一に終わらせず，次善・三善…の成功であっても，それなりの社会威信と富を享有できる，という選択肢に幅のある出世の戦略を生み出して，職業観念の上での流動化をもたらしました。

たとえば，「士」身分に列する家庭でも，子弟にすすめて，その才能に応じて地方の教師，占卜，医者，僧侶，道士，農業，商業，各種サービス業に就くことを奨励しました。南宋浙江衢州信安の人袁采（1140－95）の家訓「袁氏世範」巻中，“子弟当習儒業”には，以下の記述があります。：「士大夫之子弟，苟無世禄可守，無常産可依，而欲為仰事俯育之計（仰以事父母，俯以育妻子），莫如為儒，其才質之美，能習<u>進士業</u>者，上可以取科第致富貴，次可以開門教授，以束修之奉，其不能習進士業者，上可以事書札，代牋簡之役，次可以習点読，為童蒙之師，如不能為儒，<u>則巫・医・僧・道・農圃・商賈・伎術</u>，凡可以養生，而不至於辱先者，<u>皆可為也</u>，子弟之流蕩至於為乞丐盗窃，此最辱先之甚，…」（斯波，1968，P. B. Ebrey，1984）。

中国の東南方のいくつかの地域なかんずく福建では，地元の資源のなかに人材も組み入れて，特産品と同じように「人材の輸出」を地方・地域ぐるみで計画して，最善・次善・三善…の選択肢を考えながら，若者を教育し，奨学金や旅費を支援して外地に送り出す戦略を練ることが普及している，という記述が盛んに見られます。その一例，南宋江西撫州楽安の人曾丰（1142－？）は，福建でとくにに目立つ「人材輸出」をこんなふうに述べています：「居今之人，自農転而為士，為道釈，為伎藝者，所在有之，而惟閩（福建）為多，閩地偏，不足以衣食之也，于是散而之四方，故所在学有閩之士，所在浮屠老子宮有閩之道釈，所在闤闠有閩之技藝，其散而在四方者，固日加多，其聚而在閩者，率未嘗加少也，夫人之少，則求進易，人多，則求進難，少而易，循常禄ヒ（比），可以自奮，多而難，非有大過人之巧，莫獲進矣，故天下之言士言道釈言技藝者，惟閩人為巧，何則多且難使然也，多之中不競易而競難，難之中不競拙而競巧，不巧求而獲者有矣，未有巧而不獲者也，故閩人之凡為伎藝者，多擅権門通肆以遊，凡為道釈者，擅名山大地以居，凡為士者，多擅殊挙異科以進」（曾丰『縁督集』巻17，送繆帳幹解任詣銓改秩序）（斯波義信，1968，譚其驤，1986）。

ここでよく考えてみますと，地方社会から県城，県城から府州城，府州城から省城という外地での活躍の順序は，「士」への道をすすもうと「商」への道をすすもうと，よく似た階層秩序の階段を上へ上へと上昇していることがわかります。「士」の場合は，省の試験に合格すると次ぎは国都をめざすわけですが，「商」の場合は，多くは隣り合う二，三の省レベルの地域に足を伸ばすところが違うかもしれません。「士」も「商」も同じく郷党の絆，同郷のよしみ，郷里への忠誠を分かち合い，郷党の支援集団と密接に結ばれていたのは，すでに宋代に萌しているのですが，明の嘉靖・万暦ころから，『士商便覧』の類の「士」でも「商」でも外地に出たときに役に立つガイドブックが，かくれたベストセラーとして江西，江蘇，浙江，福建などの本屋から刊行されています。それはこうした背景から生じたと思います。さらに，同じ17世紀ころになると，同郷団体が外地に遍歴する同郷出身の工商仲間や科挙受験者仲間を支援するために，主立った都会や町にさかんに「会館」「公所」を設けますが，これも同じ理屈で説明をすることができます。

「士」と「商」とが社会移動戦略の上で共通の路線をあゆんだことを，以下で紹興／寧波出身の集団について述べる前に，科挙試験の合格率を全国的に見たとき，東南部の諸省のそれが断然突出していたこと，すなわち，科挙試験は公平に近い試験方法で全国画一的に行われたにもかかわらず，その成功率には歴然とした地域差・地方差があったことを一瞥しましょう。

進士試験合格者の全国トップ・ランキング五傑順位：（J. Chaffee，1985，Ho Ping-ti 何炳棣，1962）

❶ 地域別全国順位五傑

北宋：福建路，浙西路（江蘇省南），江西路（江西省大半），江東路（安徽省南），

南宋：福建路，浙東路，江西路，浙西路，江東路，

明代：浙江省，江蘇省，江西省，福建省，河北省，

清代；江蘇省，浙江省，河北省，山東省，江西省，

❷ 府州別全国順位五傑　＊福＝明清の福建省，蘇＝同江蘇省，浙＝同浙江省，川＝同四川省），江＝同江西省，広＝同広東省

北宋：建州（福），福州（福），常州（蘇），興化軍（福），泉州（福）

南宋：福州（福），温州（浙），吉州（江），饒（江），眉州（川）

明代：吉安（江），紹興（浙），蘇州（蘇），南昌（江），常州（蘇）

清代：杭州（浙），蘇州（蘇），福州（福），常州（蘇），広州（広）

この表のなかで，浙江地域は南宋から清まで，全国でもまた東南部でも，科挙では抜群の成功率を挙げましたが，その中で紹興とその東隣りの寧波（明州）は，清代には〈寧紹幇〉とか〈三江幇〉とよばれまして，同郷の絆をテコにして官界だけでなく商界でも名を轟かせました。そして上海が19世紀に急浮上したときに，大挙してこの地に進出して，上海商業グループの中核を形成するようになります。寧紹集団の存在を知らしめましたきっかけは，先ず紹興人による科挙ルート上の成功です。進士の高い合格率に加えて，挙人学位の試験でも成功者が多く，かれらは清代に北京の中央政府で，戸部（人事院）の胥吏（clerk）の要職を独占するようになり，これによって全国の胥吏ポストを制する勢いを持ちました。また県や府州の知事が政務の私設秘書として傭う〈幕友〉の職についても，紹興出身の挙人はその人材の供給源として知られ，〈紹興師爺〉とよばれました。

商業界における〈寧紹幇〉は，運船業，輸出入業，加工業で名を挙げていきますが，清代になって〈銭荘〉すなわち中国式銀行のシステムを発展させて，今述べました業種を金融面でも補強しました。南京条約で上海が興って，長江デルタ部の都市のシステムの頂上都市が蘇州・杭州から上海にシフトしますと，〈寧紹幇〉は活動の場を上海に移して，近代的商人集団へと脱皮していきます。

寧波は唐までは越州の東半部の地ですが，晋代から小運河で杭州と結ばれ，ついで大運河が杭州にまで届き，また東シナ海で海運がさかんになりますと，越州東部の海港である鄞県が急成長しまして明州の州治となり，こうして旧越州の西半が越州（のちの紹興），東半が明州（後の寧波）となりました。寧／紹の商業グループは，清の半ばまでは福建・安徽・山西といった旧来の商業勢力の下に雌伏をつづけていましたが，上海の登場という機会をとらえて旧勢力を排し，やがて近代化（現代化）にも適応しました。1902年に上海商業会議公所

（のちの上海総商会）ができると，その会員の大半は寧／紹出身者が占めました。ここで面白いことが指摘できます。たしかに19世紀の中国社会は，概して農業的でしかも政府の階層支配の下にありましたが，‘状況と文脈’（conjoncture）いかんでは大きな変革に適応できた地域・地方があった，ということです。上海は1915年には工作機械の輸出に成功しています。‘状況と文脈’は地域差・地方差・文化生態の差の問題でもあり，これは宋代このかた激しさと複雑さを増してきたわけです。中国社会の分析において，文化的ないし制度的な説明だけに偏りすぎると，この大事な局面が見えてこなくなります。

おわりに

あと残る時間で，唐半ばから生じた社会変動に対して，商業発展がどういう推進力となったかについて，簡単に申し上げます。古典派のアダム・スミスが説いた近代以前の経済発展の構図では，技術の変化の要因として交通の改善をまず考えます。経済距離が短縮され，輸送コストが下がって，広い地域が経済上で有機的な纏まりを与えられ，域内で‘比較有利’の考えが共有されます。そこで各地の生態条件に応じて産業が特化して主産地を生み出し，産品が商品となり，商人の活動の場ができ，市場の組織や制度，金融・信用が改善される，というものです。もちろん，政府が平和を確保し，農民の所得の格差を是正し，制定法をととのえ，流通を円滑にする条件をつくりだしたことが，こうした発展を助長していることはいうまでもありません。

唐宋時代でスミスの予想したような変化を考えるとしたら，まず，大運河の完成（610）とその波及効果が挙げられます。水運・海運・陸運ともに画期的な改善を生じますが，効率からいえば，海運・水運・陸運の順序で格差があり，海運と水運を改善する潜在性の高かった地域・地方とそうでない地方とが，スペクトラムの両極となって，地域・地方差のはげしい差異を生んだと思います。ここで商人の出番となります。むかしから商（客商・遍歴商人）・賈（鋪戸・定住商人）・牙儈（牙人・仲買人）の三大範疇がありますが，唐宋時代に目立つ変化を起こしたのはなかんずく客商と牙儈の部類です。客商は８世紀はじめから運船業と結びついて発展しまして，必然的に運船問屋（船戸）・運船労働者を生み出しました。さて海・水・陸運は中継点（宿場町や港）に常駐のエージェントおく必要があります。旧来の牙儈範疇の仕事も兼ねる村店・邸店・房廊（坊廊）・停場などの業者が史料でも目につくようになりますが，ここから倉庫業・委託販売・集荷業者，そしてクレディット（信用授受）制度が育っていきます。なかでも運船業は宋代になれば分化して，船舶所有者，陸上の荷主，その代理人としての船長（綱首），船内の労働者（夥伴）の監督としての船長（舵工），船に便乗する客商集団（附搭）の各グループが，１航海（航江）ごとにひとつの経営

企業に参加する，という形も生まれました。経営構造上の分化は，ほかに陶磁器産業でもたしかめることができます。

こうした変化と並行して，都市および非農業的な集落の分布でも，画期的な現象が生じました。行政上の大中都市，すなわち国都，各路（後世の省）の首都，府や州の首都（府州治），それに交通の要衝，人口密集地の県の首都（県治）において，人口がふえ，商工活動が盛んになって，旧来のような政府の介入による営業や街路・居住に対する厳格な統制が空文になってしまい，すなわち伝統的な「市制」が崩壊して，営業の自由度が格段に増加した（加藤繁，1952，D. Twitchett，1968）ことは，改めて述べるまでもありません。付け加えるとすれば，こうした都市や小都会が大量なサービス業をはじめとする「游手」を生み出す場所であったことです。

もっと斬新な変化は，県の首都以外の農村地域に市とか店とか埠とか，やや大きい鎮とか呼ばれる町が，文字通り無数に湧き起こってきたことです。全国で1500あまりあった県治の一部は，経済的な力量の上で有力な新興の小都会に太刀打ちできなくなり，行政・文化拠点としてのみ機能するようになりました。課税の関係で記録に留まった小都会の数は，北宋末で定期市レベルのものを入れて2万を超え，そのうち鎮は1800あまりです。この位の数量の分布の下では，極端に辺鄙な山村でもなければ，農家の生活は商業活動の洗礼をうけざるを得ません。なぜなら，自分の村のまわりに定期市がいくつかあるので，東西南北の市に出向けば毎日のように市に出入りするからです。

たまたま，1077年に編まれた計量データとして，宋から清を通じて唯一現存する商税徴収の全国記録があります。商税は780年の両税法で導入され（商税の名称は五代から），清代まで重要な政府財政の収入源になりました。内容は過税（関税通過ごとに各商品から従価2パーセントを収める内地通過税）と，住税（目的地の市場の入り口や城門で従価3パーセントを収める入市税）で，若干の付加税を伴います。商税リストおよび関連の史料を見ますと，農民の農産品・加工品・外地向け産品がエージェントおよび客商の手で集荷され，反対に外来商品といっても塩・茶・嗜好品や反物類が流れ込んでいた様子がわかります。商税が両税法とともに重要な税の項目となり，清末までこの状態がつづいたということは，客商の活動，これに付随するエージェントの台頭を措いては考えられません。先に申しました「游手」範疇人口の激増であるとか，宋代から税法関係の議論で頻出するようになった農村部内の資産，すなわち「営運物力」「家業物力」，その内容をなす質庫，坊廊，停場，店舗，租牛，賃船，計六種にわたる農村内での商業営利の査定とかは，この商税統計が語る状況と裏腹の現象であるとみてよいと思われます。時間の制限がありますので，本日はこのあたりで終わらせていただき，次世代を担う方々が興味をもって下さって，「考証」の業をひきついでくださることを切に希望いたします。ご静聴をありがとうございました。

参 考 文 献

加藤繁『支那経済史考証』上，下，東洋文庫，1952，1953.

和田清「歴史上より観たる支那商人の位置」史学29：2，1956

A. F. Wright, ed., *Studies in Chinese Thought,* 1953, (Chicago)

J. K. Fairbank, ed., *Chinese Thought and Institutions,* (Univ. of Chicago Press, 1957)

Gilbert Rozman, ed., *The Modernization of China,* (The Free Press, 1981, pp.148-153.)

F. Wakeman, Jr. & Carolyn Grant, eds., *Conflict and Control in Late Imperial China,* (Univ. of Califorrnia Press, 1975)

Ch'u Tung-tsu, "Chinese Class Structure and Its Ideology", in J. K. Fairbank, ed., *Chinese Thought and Institutions,* (Univ. of Chicago Press, 1957, pp.235-250)

Ho Ping-ti, *The Ladder of Success in Imperial China: Aspects of Social Moblity, 1368-1911,* (Univ. of Chicago Press, 1967)

斯波義信『宋代商業史研究』(風間書房，1968)

梁其姿『施善与教化：明清的慈善組織』(聯経出版事業公司，1997)

Patricia Buckley Ebrey, *Family and Property in Sung China: Yuan Ts'ai's Precepts for Social Life,* (Princeton Univ. Press, 1984)

譚其驤『宋本方輿勝覧』前言

John Chaffee, *The Thorny Gates of Learning in Sung China,* (Cambridge Univ. Press, 1985)

G. William Skinner "Mobility Strategies in Late Imperial China, A Regional Systems Analysis", in Carol Smith, ed., *Regional Analysis,* vol.1, Economic Systems, (Academic Press, 1976)

Susan Mann, "The Ningpo pang and financial power at Shanghai", in Mark Elvin & G. W. Skinner eds., *The Chinese City between Two Worlds,* (Stanford Univ. Press, 1974)

John Cole, *Shaohsing: Competition and Cooperation in Nineteenth-Century China,* (The Uniiv. Of Arizona Press, 1986)

百瀬弘『明清社会経済史研究』(研文出版，1980，原載『小野博士還暦記東洋経済史論集』1948)

Glbert Rozman, *Population and Marketing-Settlement in Ch'ing China,* (Cambridge Univ. Press, 1982)

山根幸夫「山東省滋陽県戸冊」比較文化研究所紀要45，1963.6

Y. Shiba, "Rural-Urban Relations in the Ningpo area during the 1930s", *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko,* 47, 1989

斯波義信「1930年代寧波の都鄙人口」友杉孝編『アジア都市の諸相：比較都市論にむけて』(同文館，1999)

Denis Twitchett, "Merchant, Trade, and Government in Late T'ang", Asia Major, XIV, 1, 1968.